

大雪に見舞われて

宍粟に移り住んで三年目、今年の冬は大雪に難儀させられた。内モンゴルの草原で生まれ育った私にとって、寒さは苦にはならない。むしろ、日本では冬の方が過ごしやすく、元気が出てくる。しかし、先月半ばには雪で膝が埋もれるほどになり、買い物はおろか、ゴミ出しに行くのも一苦勞だった。乾燥している故郷では、歩けないほど雪が積もることはない。途方に暮れるまま、雪が降り止むのを待つばかりだった。

ところが、数日ぶりに太陽が顔を出した朝、自宅前の路地に出てみて驚いた。知らぬうちに雪が掃き固められ、大通りにはいつも通り車が行きかっている。私が憂鬱な気持ちでまごついている間も、地域の人たちは平常運転を続けていたのだった。数年ぶりの大雪にもすぐに手を打って日常を取り戻す身構えには、地域の風土のなかで培われてきた知恵と力強さを感じる。

今回の大雪で、あらためて地域の温かさを感じることもできた。ここには、何も言わずに路地の雪かきをしてくれたご近所さんがいる。車の運転ができない私を気遣って、自転車では危ないでしょうと市街まで送迎を申し出てくれた友人もいる。お隣さんから教わって育てた畑の白菜は、雪の下でも萎れず待っていてくれる。

住めば都、という言い方がある。ひとりで立ち往生したときに頼れる人や自然と出会ったことで、宍粟は私にとってかけがえのない「都」になりつつある。

1月17日の景色は特別だった。屋根、畑、道、草木まで雪に覆われ、一面銀世界だった。数日後には雪は融けてしまうだろうと思っていたが、2週間が過ぎてもまだ雪が残っていた。宍粟市山崎町宇野に移住して2年半以上になるが、このような経験は初めてである。

地域住民から今から30年ぐらい前に同じような、あるいは今以上の雪が降ったことがあると聞いた。みな学校も会社も休んで雪掻きに必死だったという。山崎町には積雪量を記録する装置が設置されていないため、どれくらい積もったのか正確な量はわからないが、29号線から自宅までの道のりでは成人の膝ぐらいまで雪が積もっていた。

移住後、悩まされてきたのは酷暑と草刈りぐらいだった。冬は晴れの日が多く、雪が降ってもすぐ解けるため、どちらかというところでは過ごしやすかったが、今回は少し違っていた。仕事やゴミ出しのためにどうしても出かける必要があり、除雪しなければならなかった。29号線の道路両側の残雪によって、自転車で山崎の街中まで出かけるのは無理があった。さらにひとつ悩みが増えてしまったと肩を落としていたら地域の人たちに助けられた。買い物に行きたいときは車で迎えに来てくれた。出かけられず困っているとご近所さんが除雪してくれた。在宅を余儀なくされたときは遊牧民農園の野菜（大根や白菜）に救われた。

「住めば都」という表現がある。前から知ってはいたが、なぜ住めば都になるのかあまり深く考えたことはなかったが、困ったときに人と自然に助けられると地域との

関わりはぐんと深くなる。都会にない自然に加え、人の優しさに触れると、同じ場所が違って見える。

屋根上の雪が融け落ちる音が昼夜問わず聞こえる。雪水で田畑が潤い、良い春になってほしいと願った。

